



俚語文庫  
五十三

45  
藁太句集  
三卷  
上

5  
1139  
45







我莫太先人此句集初編ありて編  
 子夫と傳ふは又昔の暇に書かざり  
 編集乃此れに印とよむるは師の机上に捧  
 しと深きくも及ばずと云ふは  
 未幸なるもさるるもさるるも  
 おもはれどか或共省くは物とては編  
 とお嗚呼師の母ありて烟霞に寝寐し泉石  
 起卧し青山白水胸中の蓄積し一吸一呼





錦繡の河のほとり 誠の真妙なる色又霞の  
月の玉の如く 玲瓏透徹 意興と空  
中の声相中の色鏡系水月如く 言五七の  
其餘情儀能く新なるも 舞の舞後志  
好事能く門法なるも 豈是く集る感ある  
を舞やとありの心

寛政五年昭陽赤奮若秋 振亭三略誌

夢太句集 三編

雪太郎二路纂輯

雪中菴宛來校訂

春之部

歳旦

志乃女やさしに女に花の春  
まの雛や日の梁も何なる  
孫も何りそ孫も何人 初鳥  
と初見れんとく来りては



井心は月持すことの光は乃春  
まにみえぬ水はあを流ひたり  
ちのちの如清土乃白きとてさうし  
梅の香乃書す人なれば春  
初はしらやすの徳と秋の月  
手あまの飯えいきとて初曆  
を川こよもさしとて小元日なるを  
草子も乃色中よりすし君りのこ  
十徳の何きまは定まらば海をえ

本歌下巻を結んで了る後よみ  
人くゝと對す

ほろひや松を名乃美し耐  
元りや梅の如き余は新なりし  
福もあや天智の法種人積あま

老翁集

礼帳や先くはしし書袖人  
元りや明く春時さきく須磨  
之日きはと念ふは江戸の春  
伊降やあは初言も梅物



初春

破魔弓の的うきうき納豆  
羽子の子甲冑中あつて空に筑波山  
隈也や響尾いすし里つら  
は好引や去月八半穂より合を  
鞭のうた紐一様也し  
想也や已姓をたつは糸水  
さししや今戸誠村より月  
はあの上よりいふ舞傀儡は

るわ

初子の日抱て義小松の阿里

妙義詣乃使者に逢

足徳尾くは是成徳くは初節

若菜 野老

君にお生あつてやさお下りる系  
操女よ形くさ乃去し若菜  
少る女のいふはあつてあつて  
下あつてあつてあつてあつて



送しまゝにせしめ見せしめ物  
芥つと千瀬の心は河山  
まゝに玉の心は松の心

縣石 粥杖

粥杖の信連庵をこゝろ  
粥杖の信連庵をこゝろ

梅

人言の月おほく梅見え  
人言の月おほく梅見え

梅の心は松の心  
梅の心は松の心  
梅の心は松の心  
梅の心は松の心  
梅の心は松の心  
梅の心は松の心  
梅の心は松の心  
梅の心は松の心  
梅の心は松の心  
梅の心は松の心

聖廟奉納

梅のつぎは神乃心

亀戸御社







田家

鳴き声あつては鳥の鳴き声  
さうしては鳥の鳴き声  
さうしては鳥の鳴き声  
さうしては鳥の鳴き声

鶯

さうしては鳥の鳴き声  
さうしては鳥の鳴き声  
さうしては鳥の鳴き声  
さうしては鳥の鳴き声

箱根

さうしては鳥の鳴き声  
さうしては鳥の鳴き声  
さうしては鳥の鳴き声  
さうしては鳥の鳴き声



鳥子一巻の羽をよみし

頭芭蕉翁所持の水滴

うらじやそくくはねの現あり

竹道う三代白兔園印結ぶるを賀

夢の境之世あやや自由星

うまは比叡の卵あはふめおあ

空乃卵をふまぬまききうれ

美鳥やさくくはねの節は

能羅馬楽

そよよまけけつうのがほけつう  
あふけつうはよと

そよよまけけつうのつるま

二歳

えんはあ〜江戸を〜やねうひ

松陰やあは汲く水車

之井やあは清く水車

程々の画賛

海〜や酌〜もねふゆら

瓶波菴



帆を巻く坂も春の空の如く白

空の如く春の空の如く白

遊んで梅子乃子まゝの夜

小田原川里禪尼送別

此の終り門の扉はあけぬ

春風

春風のふかき水は連河の如く

あきぬ人とならぬ人の如く

春の空誰か裂けぬ

ふかき山の松をばかしてゆく  
香合の如く

春の空やけも松のちとせ山

風中

子よあつぬお糸やいうら

中務卿送別

春の空風中七さうぬそふ

春月

春の月の水と二月乃二はま

猫乃子結身御おとし月



大名の橋ゆく喜々お世も力  
ゆるしんぢきよき水のみ

善村を悼

ち〜形ま山の端え〜り橋を

業平胡弓の賛

あぢりのひ〜〜月

春雪

喜みき吹か〜〜して橋を  
流〜や鳥〜〜〜〜〜

流〜お都お海せ〜ぬお〜の船  
奏のお乃〜〜〜板を  
流雪〜わけの〜〜見

小堀金井亭の楽

何〜も〜と〜〜解〜葉の縁

雪解

雪〜けや〜〜〜〜

余字を考す

小袖〜川おき〜と乃捨



春雨

清らけ目もさるふたつあまはる  
 出るく人なわの傘の下  
 ちかやあはらう海おの暗さ  
 孤火もさるく春さるあはる好  
 ちかやあはらう海おの暗さ  
 照るは様くゆかしげふの雨  
 利き入るく海なるあはる

ふねのお某さるし春乃る

春水

源も柳をさるく春乃る

若草 八十八の賀

こはらうるもや八十八おより

父母の駿河行の所別子孫川に或人の  
 別業を括る各題を撰る日本紀を  
 便以殿敷盧島宮國中之柱而陽神丸  
 旋陰神右旋倉巡國柱同會二面

美州やちの津く男さるし



柳のよみかた

いづこもあはれし柳のよみかた

柳

先聖のよみかたはまはれし柳のよみかた  
けはれし柳のよみかたはまはれし柳のよみかた  
新湯のよみかたはまはれし柳のよみかた  
まはれし柳のよみかたはまはれし柳のよみかた  
寺のよみかたはまはれし柳のよみかた  
まはれし柳のよみかたはまはれし柳のよみかた

とちりし柳のよみかたはまはれし柳のよみかた

まはれし柳のよみかたはまはれし柳のよみかた

唐のよみかたはまはれし柳のよみかた  
まはれし柳のよみかたはまはれし柳のよみかた

まはれし柳のよみかたはまはれし柳のよみかた

道のよみかたはまはれし柳のよみかた

まはれし柳のよみかたはまはれし柳のよみかた

無名の人よみかたはまはれし柳のよみかた

まはれし柳のよみかたはまはれし柳のよみかた



老木あけ柳の影の賛

好むとていふに柳の影

柳の牛の画

鳴くは牛の音あけ柳の影

閑帝の画賛

青柳や想ふに乃美聲と

多柳や暖の地は厚くまじり

陽炎

かき流るや先年松の天意と

猫逸

けのゝ顔もや猫の意

燈もて帰るおも猫の意

洗つておまお夢目や猫の意

美えし耳と知れぬこの意

白魚

うゝ急や解も此花も見

椿

三ッおまおまお川も花も花



初年

初年や命久しき祝賀  
まつりやぬれた神の福や  
は川まほや賽名鏡磨  
初年やけふたは結切り  
まつりや魚のたのしみ  
初年や二の午笑ふ若乃妻

禅林

初年や此解カイ者タ鞍カ小僧ト

初年や春あけの寺

初年やも屋の正一位

大隠の市

初年や大隠の市

蝶

まつりや白き袖も深あつ  
名はくも初あはれ  
三連の蝶  
お井の友蝶







小梅

紫あけとしや南風しるおんき

燒跡

新澄や燒やまの松の月

畦観

月乃まきく水鏡し啼か川

川ヶ幸れ路や埴乃坐禪石

木枕のおほまなりぬら

空想本本場まきくしるりの畦

民好く日永あめ観計

春日

昔春宵短而起日高

起さぬおひつけ

足利大日如来奉納

去りのまや城のま

雛

昏雛や星を嬉塔乃竹の合

如好の京花瓶に地を定めり

沙更く老をりれ母の能



高足乃内裏ふりしや頂上の籠

翠見亭

籠拥のちまき葉をわきし柳

出代

かろくもわ下流に積えの物りたし

熊野女

宇代やを所新ら母のこ

桃

柳のくさみ井の林り那

里人や柳を映して葉のこ来

道仙田一見 流る流の柳をこ

呼吸のま遠里いく津柳のこ

花

さしつらぬ花の友あり因西

も後人乃扇をくし一花を屋

二より安山寺の客やふらう架

花多山

帆しけ船のねしよ花のねし



志乃山 柳行ハ誰ウ立サシ  
多クヨリ 鑑遊一 花雨

見あるハハ好クヨリ 如の面の公

志乃山 志乃山 志乃山 志乃山 志乃山  
山路を道

先リハ西征を誰花ノ旅

あゝ人の洛乃 旅宿ノ事

大川をれや先サキノ智恩院

恭里故友のけしき  
しせり 御を道

花多や日記さ人男女文...

文母ハ 旅府ノ事

死いハ 旅ノ人...

柳儿ハ 旅

花多本の下けハ 旅ノ事

旅ノ事

言ハ 旅ノ事

草

何の事ハ 旅ノ事



いふらちの舟花のしん切らん  
まげしとたをまげし

鳥帽子山

花をやりらるるは鳥帽子山

頭風鈴

風鈴の音のしるは行路に

袴の帯持てる髪

見えし髪よと花乃は詠宣

眠布袋鬘

山崎の人のととの陰

三番叟髪

うねしんをよのり鳥髪

かゝ女の髪

面上西湖わいとるん表中高く  
妙鏡御供

け居や美敷る花をん九折

三十番神奉納

中神乃や風流花法

嵐雪急ぎ紙



山くさむちのさかきよきうらうら  
山乃端のさすむらよんうらゆ梅

上野

むきまのさかきよきうらうら

梅

山乃端のさすむらよんうらゆ梅  
山乃端のさすむらよんうらゆ梅

東廬山六句

年くさむちのさかきよきうらうら

山乃端のさすむらよんうらゆ梅

山乃端のさすむらよんうらゆ梅

山乃端のさすむらよんうらゆ梅

山乃端のさすむらよんうらゆ梅

山乃端のさすむらよんうらゆ梅

山乃端のさすむらよんうらゆ梅

上野

山乃端のさすむらよんうらゆ梅

山乃端のさすむらよんうらゆ梅



七柏集擬古七変發句

貞徳乃頃

後編 連理の梅人牛乳梅

檀林の以

折子いさめ梅やハキ梅

次韻乃頃

白江の梅が年よふる白梅は久し

虚栗の以

あゝの梅や君う歌夫上

後編栗の以

歌々や纏もは是も梅川

未集記乃頃

ふさみよとらふは山見の年

後編乃頃

古道よめらるる梅

よ梅の頃

山 梅や君う梅ハ咲かす梅

芳如の梅よ 梅の詞友を梅











春雜

三十一

明くは花の代りては

まは丸老人七十がうまの流林の芝居  
画せは子頼し

まは七は成人魚の芝居

無きまはうまの芝居

鶯のまはし

仙舟の壬の賀

先後く松の浦のまはし

文屋の初夢の賀

まはまはまはまは

まはまはまはまは

まはまはまはまは

悼月景

人まはまはまは

まはまはまはまは

まはまはまはまは



よーあつる門鼓きよ水花心  
味方うらま

春のゆきをまきよの草の枕ふ

二月のよもぎまじりし花和をな悼ふ

あーし物心こりあ乃名綴ふ

白麻子

蓮をまじりあ花朝の夕日る花

花活し梅の枝春のまじりも画ふ

あぢを名あまや春のえなり

寫生のあらま時  
あまを志のま  
三條のたをまか  
あまはあまの  
のあまはたの  
くも目あまの  
あまのま

本も作もまあまをまじり接種

白麻雜髪

くらりくらり彼はあまのま

あまのまのあまのま

あまのまのあまのま

あまのまのあまのま



雛雛よこしめしなまじい病瘡の神

徳君よこしめし我古稀の齡を祝ひ給ふ  
よふと云は謝し

菊苗や子よふふふふふふふふふふ

何人の子か

子世極く二世ふふふふのあふふふ

父母の縁者よふふふふ

水ぬきぬき一日たけり都る

子よふふふふふふふふふふのあふふ

田畑中よの角たけよ 地牛

控へ居や二方よ拂て炉の名残

三月廿一日町人万句集

草あまきよ山ひくく日を静らふ

平家文

梅こころも梅らる梅畑む世を

子布蕨のあはれけ御子安井よふふ

むらきくちあふふの曉舞ふ

大津絵乃舞

振袖のまきく寝くふの化



春のついでに  
夏もあつた  
秋もあつた  
冬もあつた

神代やうき  
神代乃下り

神代乃下り  
神代乃下り

暮春

春のついでに  
夏もあつた

神代やうき  
神代乃下り

神代乃下り  
神代乃下り

神代やうき  
神代乃下り

蓼太白集 三編

夏之部

更衣

夏之部  
更衣  
夏之部  
更衣  
夏之部  
更衣  
夏之部  
更衣  
夏之部  
更衣



後臨く後者志のふ給うぬ

郭公

我志きのの候なきしおれまは  
そのまゝに多きくはく子規  
ふめ後人とも扇なるの書は  
諸人よ結く飛ぬぬまはす  
杜若のつらきまはり 杜若  
はまきおほきこるまはまは  
年く地のかまもや 時多

ふまきつたに羽えくろ胃鏡  
杜能成や瀧端の夕暮海  
ほまきまき廿九の七日おまは  
まきまき 中まき井のまき

百書句合

まきまきのぬりまや子規

山王法樂

本乃分まき神やまき杜能  
まきはまきまきまきまき







縁を帯びてのすしを起す書はわらわの  
まゝに傳へしは中のあるる書は無  
事風流し納め坊に書は馬場子  
く門前の子に傳へるはあつても  
しよのおおきくふまぬりけん

馬場乃書や馬場乃子親

牡丹

はしはて天府君のまはりけん

遠く牡丹乃書や馬場

初平侍りての書は我々年終る目も  
世に万府君の招きも終るは厚  
河のまゝの書はあつても厚

流しまるあ

牡丹の書は人しる馬場  
初平の牡丹の花は馬場

牡丹の書は馬場上人の書は馬場

芍薬も牡丹の品は馬場

杜若

新書は水戸門の書は馬場  
此より馬場は馬場  
馬場は馬場は馬場







灌佛

灌仏マ〜〜〜物ハ付  
花ハ生ケテ〜〜中ハ

此ハ西暦七〇二年一祖師ノ新案  
ナリト云フ事ハ會ニハ二

海ア〜〜花亭堂

大ニ〜〜七部集

弁花

弁ハ〜〜丹國

若葉

若葉ハ〜〜細

雨涼〜〜若葉

正行教訓の画

楠〜〜ワ

先師墓系

〜〜若葉

目玉

垢離〜〜楓



芥子 *芥子*

前は乃母や持らんせいのふ  
芥子の花をば庭水の掃きぬれ

*我はなほのよりのうらみはつらふ  
乃を恨しき事なき日か  
とくしきもおれよと所をさす*

点字のありき多々や芥子坊主

短夜

短夜くまはしとやつらよ百六日

*是はとるの山初らつて  
たしとての白く*

*瓶をくく 睡中孝白の画*

野下通て後夏八おのり架

麦秋

*まわり乳母の命麦一袋持来*

夢よーと娘ーまに茶の影を

茄子

何れもはなをわ化らん芥子

草

老懐



あめ〜〜〜羊喰らふも無し

洞柳新完

竹の子やうらうらハ風の柱建

扇 くらん

白扇よ

風も此〜〜〜扇よ

半蔵よ〜〜〜

猿ま〜〜〜の扇よ

少佐よ〜〜〜  
社名のゆかり〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜  
〜〜〜

扇〜〜〜

〜〜〜

涼〜〜〜

端五

玉水の昔薄〜〜〜

白〜〜〜



こゝろ湯や流島の流はなほあはら

中村のゆきゆき見物  
市村のゆきゆき見物  
身振ふゆきゆき見物  
人の眼をよらこえしゆきゆき見物

所代人形或振 口上 市川團十郎  
山崎とゆきゆき見物 大將人形  
面うゆきゆき見物 猿の馬具 傳五郎

さしやあはれもあ甲

サシタのい芝居の流暢建をり  
臨田の子布うたせゆきゆき見物  
ゆきゆき見物ゆきゆき見物

ゆきゆき見物ゆきゆき見物

去年ゆきゆき見物ゆきゆき見物  
世子身はゆきゆき見物

ゆきゆき見物ゆきゆき見物

ゆきゆき見物ゆきゆき見物

ゆきゆき見物ゆきゆき見物

ゆきゆき見物ゆきゆき見物

ゆきゆき見物ゆきゆき見物

ゆきゆき見物ゆきゆき見物

ゆきゆき見物

ゆきゆき見物



科子養の...  
今も七地...

君の情... 釜の中... 年月の鏡と母

初盟女子の...

附く... 君の... 年月の鏡と母

医師海桐... 紀村固宗... 百回志

はる... 香... 草... 乃... 乃...

七十の... 髪... 髪... 髪... 髪...  
箱

百... 乃... 君... 歌... を... みる... 人...

印... の... 乃... の... 乃... の...

法書の... 鷹... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

乾... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

五月雨

乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...



草菴雨

~~~~~の~~~~~

~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~



燕山鬼丸亭

多ふりやふるまの裾田乃蛇牛

中東の隈古海の趾

陸尺のほくりの指 田科取

親世言ま納

里くくふちかちや田はよ

群月亭

破り中ふさ田も色し月の意

三嶋法樂 多神大山祇命

魚をれ捕もさくはは田は

舞終の契

万倍よ終の糸乃ま田うれ

藤花 菖

清水白鹿寺乃ち流を橋川といふ

とねむや白ふをえんれた橋川

旧公おの藤うあとの狛賢

藤乃氣也く川寺に安成水鏡

金葉子の許よりちりるは神極一







堂の架物あるを旭山  
子休あしあし

おろしよる道や。團扇の  
竹を山々帯れ木の伸る

蝙蝠

鳩々天窓もつら古けら

蚊 蠅 蚤

身むのよ深き 帷の四隅に

夏虫も入火

帷階。壁獨り竹く入坂うね

又母守自門町新宅

地居織乃枕時斗や牛車

桂麩止宿

嬉しくも新し敷座は白うれ

津玉神戸の瑞々魯剛を道

帷つるくは須磨の物語

大其城の羽儀

朝夕流地居も若くは羽衣



伍もあつたしうらなりのなつて

うらふとよよの幌打

湖ののちよはつて乃言を伝誠よ  
此は乃小笠人の世のなつて  
乃草薙花よつてついでついで  
ゆつてついでついでついでついで  
を捕へついでついでついでついで  
のちよはつてよあつてついでついで  
ついでついでついでついでついで  
あつてついでついでついでついで

あつてついでついでついでついで

夏 雑多

萩屋やあつてついでついでついで

よつてついでついでついでついで

橋中

あつてついでついでついでついで

水影ついでついでついでついで

木西ついでついでついでついで

蘭田ついでついでついでついで

蕨山乃屋よつてついでついでついで  
ついでついでついでついでついで  
ついでついでついでついでついで

あつてついでついでついでついで



飛波山

空の鼻とくもくねくね波山

夏木立

唯の鼻ある寺の夏木立  
空の鼻とくもくねくね波山

松竹寺

古の竹一樹くくありあり

大津精舎願神と納

夏夜やまはるは川松の月

若磯や月さらさらのし

夏草

なりまの種々の灯を灯のし

華山道場おくら山家後乃旧跡見のや  
いりより持舟川を流して徳和院の  
聖方寺前も平地し畑中よまある石の音

夏くはやもくねくね波山

向うの守山の眼の事とて夏草立  
おのれとて大和のあそびは後乃神とて  
け社とておのれとてあそびは後乃神とて  
願成神寺とてあそびは後乃神とて  
大日如来山家所守の余りまう古柳







魂もも思ふ我をよすれは

晴柳亭の留り戸は若るはあき  
月雲よさうさやう

夏菊の山後より一住居は

おのれは心無きものなりけり  
人よさうさやう

たぐもあはれも雪浪花

骨髄よりさうさやう

蓮

蓮乃やあはれなりの書

の生原一蓮のあはれ

蓮活くさう乃淤泥忘れ

不忠の心はあはれ

暮らば一玉津あはれ

採蓮の心備す一玉津

あはれはあはれ

あはれ書人すしすの心

物烟

五羽と見す十羽と見す

全集

四十二



蝉

い福くと蝉あつてふり柳花

強肩乃左更しつゝを語

蝉の音や語もさうききまへ

清水

緑くま山陰名泉かき

山嶺の影やわらわら草花の

ふ乃解葉のりくく山陰

清水白流と記す事納

夏けやなむらむら水音羽に

あゝ音を流るゝとて尋た

瓜

瓜陰く流るゝとて尋た

府中の有菟より瓜くく

流るゝ山陰流くらく瓜

氷室 一振酒 鮎

くくやや水の音もはの音も

この音もひり後人音も



六月廿日 赤水城あり

清くの水を流す橋のくさくさ 乃水室の  
下より安し 故よりみふ二階

君魚亭

赤水や石ころくの夏水

書林西村源吉より 赤水を流す橋

汗ぬくくさくさ 故使乃着流石

上徳寺の二階橋の上 山吹花散る

月山は杖とまきくさ 夏より

富士乃雪をくさくさ 造るん一板酒

室相子船の返くさくさ 酒

きのくさくさ 藤をくさくさ 赤い

此宿乃新生石や 船の塵

暑 一言峰

赤國お梅

暑くおや孔明のくさくさ 新れも  
くさくさ なるくさくさ 日阿のくさくさ 赤

七面山



くまのこまやまのこま

遊山留別

あまのこまのこまのこま

又立

夕まのこまのこまのこま

ゆまのこまのこまのこま

夕まのこまのこまのこま

夕まのこまのこまのこま

其角あまの画賛

ゆまのこまのこまのこま

魚子

松風家飛箱の書蹟

ゆまのこまのこまのこま

富子

ゆまのこまのこまのこま

十路の相可

ゆまのこまのこまのこま

ゆまのこまのこまのこま



竹夫人

西州の人懐くせん竹夫人

石燕う嬉しく別きし中をん

揮筆し画しを語し竹夫人  
字は愛乃足投うちの竹夫人

有卦よ入印のまはちまよ七の画  
白とく

うけし待舟や七符乃るのひり

夏月

本男み衣色る夏の月おふ

布袋月え後

白う時一味よすし空の存

お臨柳市よ途

秋のね乃しし似るる夏月

守山亭

照射のた子美く人たの月

籬

夕風や夕らちあれそ小籬賣  
ゆの籬や詠さうけちきこり乃雨



芝浦早汐のうら

地をよめ波をうららけり芝浦

夏雜

葵卯の夏

九月十日の夕暮り

故人の墓を視

此宿や多く何事か花之本

目黒西条橋名物

西日影雲がくくさる五月

扇面不登

夕影八景や門田の扇面と

画師三溪甲陽の扇面

夏虫一甲あり橋の陰草うさ

今戸西条橋

なまけく硯洗りんをみ多川

憐れ歌

宵くや梅千乃笛も吟詠多

遠江志留波の磯や今戸浦見せりや七日



清くは人乃 亭よりありて 白砂に  
も 砂丘を 付てか 元より 乾坤  
四隅の字を 申すなれ 神松の 雲居も  
あつて 磐石は 造化の 筆を 成けり  
峯より 乃て 亭より 妻の 筆を 持て  
雲の 種を 示す 雲より 松の 影も  
白く なる 何れ 人乃 此 神  
海より 又 人乃 此 神  
岩上より 乃て 松の 影も 風波  
に 浮ぶ 松の 影も 中 何れ  
諸れ 是も 又 宇宙 一本の 筆を 成  
す 乃て 乃て 乃て 乃て 乃て

余月の浦之風神は 伊良彦崎

笠帯亭

松風の復たき 谷の波くれ

大斗三回忌

舟もあき 舟もあき

全十三回忌

志乃ぬし 我復た 舟よる 舟くれ

八丈崎 舟明 舟軍 姥

反引乃ち 舟神の弓 法治

誓書

おと月 波まき 舟水 舟軍 舟



王戎

眸 ころりし味も 菓子も

時を忘

多しを 夢招きもよ 夢のさん

若くおもしろいもの 夢のさん

冷飯も 復大根の 夢のさん

うらみ くらげの 夢のさん

夢のさん 夢のさん 夢のさん

夢のさん 夢のさん

古葉の 祇園を 中や 日傘

六月廿六日 時を忘 夢のさん

茶の 酒と 月よ 夢のさん

官蔵宛 来松島 夢のさん

六月廿六日 夢のさん

夢のさん 夢のさん

秋白坊 夢のさん 夢のさん

夢のさん 夢のさん



多岐の庄

夏川や書も持て扇橋

朝方のあまのついでに海の小舟をりて  
推して至るはまの葉し

夏みりくさなうらまゝの御子

案考人の画

去りしとく案塔けて多柳

抱く塔よももごとく我英

塔田乃因主を傳

水も月も人の御殿乃大井川

先師東鑑の羽三三回忌像前

繪巻やうをそふ耳乃夏祭衣

西平六月廿五日時をさす如風  
立席乃まゝうらまゝの御子

六月お給入も師の記書これ

快林寺

筑紫の唯臨人夏も月

大和路

あまの月も田を畑も多岐川

或女おかりし



海をくぐりて復けり晒す好  
六月も夕暮をまわると二井の境  
何となく秋風ちう紀柳の乳

納涼

草花戸へ柳をくぐりて夕暮を  
山の涼蕙子風を會うとけ

早稲の葉店に柳をくぐりて夕暮を  
何となく秋風ちう紀柳の乳

着て帰る錦のお向り川涼

加田夜泊

解をもくぐりて夕暮をくぐりて夕暮

二十四孝賛田真兄寺

休てくぐりて樹もけりて夕暮

普化賛

明頭東明既打暗頭東暗既打  
四方八面東旋風歩

盤のよすりぬる夕暮  
をけりて夕暮をくぐりて夕暮  
一長屋盗人ぬる夕暮

盗人の納涼







涼しきや新きはぐくの曲も水

巴水亭の冬無風ハ昔新崎の徳もかきとけの  
の宿はたけのまらむをこころしくみぬり

雪下りしはまの里乃出るる魚

滝山石動

自然の世の年志の傍涼し

棲風居の床よりとらきぬれを  
けりてををひしけりらぬ

ふきとをまのまのまの松原

桃壺亭

夜涼しき水今月も入ん

五巻一具頭四睡 豊干

海山つ味よすりて新

信長のお是七十歳より難發  
四十余ののまをたけり

又是よると天宮も命も友涼し

出羽海崎

涼しきを運りてくま山のけり床

筑前春江のけり路より

すしきや先かこころの松



彦系

来りてや水も心のこころに

道徳彦の古の歌の歌集に  
能くして。花生の歌

涼しきや何を活しても羽を

このまはる渡りのあや。十五歳八十二歳の  
羽の歌集より。わりぬき。松林場。松  
林より。是う賀ふして。彼人の由緒

すくもわかたはる作松二木

月お布代名額

下代乃囊けりけり月涼し

くもや客はる井の常

御援

甲辰六月晦日角田川の山後彦丹  
はるりるるるるの松林場。之阿路よ  
日ゆりりりりり

此彦やとらも亦る川社

知事のお連。大川のさきゆり

色もよも見遠りの草の端

みり子乃心は似るもは松川



此乃一  
 種新式  
 之機器  
 其功用  
 甚大  
 且其  
 構造  
 極其  
 簡單  
 且其  
 價格  
 亦極  
 低廉  
 故其  
 銷路  
 極其  
 廣闊  
 且其  
 耐用  
 且其  
 修理  
 極其  
 容易  
 故其  
 銷路  
 極其  
 廣闊  
 且其  
 耐用  
 且其  
 修理  
 極其  
 容易  
 故其  
 銷路  
 極其  
 廣闊



...



